

夏……長男の帰省物語

大島 行雲

夜は過ぎしやすくなったものの、未だ日中は汗が噴き出るほどに暑い。将之は首にかけたタオルで額を拭う。

働きづめの毎日に一息ついて、久し振りに実家に戻って来た。年に一回程度しか帰らないのに、一度、実家の居間に腰を下ろして母の出してくれた麦茶を啜ると、もつずつとここに住み続けている気がしてくる。扇風機の風が懐かしくて心地好い。彼が住む東京のワンルーム・マンションの冷房の方が部屋が狭い事もある。実家に冷房がない訳ではない。つけていけないだけだ。無意味に電力を消費して、ただ一人暮らしの孤独を紛らわせるだけの様なテレビやステレオの音もここにはない。庭の植木で蝉が鳴いている。

母親は久し振りに帰ってきた愛息に嬉々として手料理を準備しようとするに詰っていた。姉夫婦も小学生の甥を連れて遊びに来ているが、今は近所の公園に遊びに行っていない。父親は和室で転がって、昼寝の最中だ。驚いた事に、かつて息子を息子とも思わない様な仕打ちを重ねた父が、帰ってくる息子の為にと家の大掃除を始めて精魂尽きたらしい。

皆、年を取った。

去年、将之は昇進試験に落ちた。同期の中で出世の道を一步遅れる事になった。仕事は面白くない。ただ、やらねばならないものが目の前にあるからやっている。これでいいとは思われない。そうは思わないようにしている。だが、自分は変わってしまったんじゃないかと不安になる事があった。だから、帰ってきた。そんな彼の目の前に、居間に飾られた父が貰った勲章と叙勲の時の写真が誇らしげに飾られている。

俺は駄目な奴なのか。

帰って来ない方が良かったのかもしれない。逃げ帰って来るなど。古い考えかもしれないが、故郷に錦を飾るまでは。自分が腹立たしい。昇進できなかった事よりも、こうやって実家に帰ってきてしまった事に。それが俺の駄目なところなんだ。

銀色のビルと灰色のアスファルトに反射する太陽を受けて、草臥れた鞆と背広を持ち、汗を拭いながらネクタイを揺らして仕事をする。それだけして、それだけで満足できればいいのに。満足とか不満とかがないところで。ただ、我武者羅に戦って。

それで？

こんな事をする為に大人になったのか。こんな事をする為に上京したのか。こんな事をする為に帰省したのか。

どこにいても、何をしても、自分の愚かさが嫌になる。父の様な仕事もできなければ、母の様な女と結婚する事もで

きない。だから、姉の様に幸せにはなれそうにない。誰のせいでもなく、自分の愚かさのせいだ。

十年以上も前、寝起きしていた自分の部屋に入ってみる。いつ帰ってきてもいいようにとでも思ったのか、将之の部屋は出て行った時と殆ど同じままだ。大きな学習机と背の高い本棚。眩しい陽光が降り注ぐ窓際に、色褪せたぬいぐるみが座っている。くまのプーさん。幼稚園児の頃、玩具屋でこいつと目が合っただけで、絶対に買ってくれと母にせがんだぬいぐるみだ。いつまでも捨てられず、そして、彼が家を離れて上京した後も、両親は彼を捨てなかつたらしい。

勿論、今の将之の東京の部屋にぬいぐるみはない。あるのは使い捨てた避妊用具。目が合うのは、ぬいぐるみではなく、生身の女だった。が、それも今はいない。

なぜか、くまのプーさんと彼女が重なる。目が合っただけで、欲しいとせがんで、そして置いていった。

俺は駄目な奴なのか。

現実と戦おうとして、現実には打ちひしがれて。人は戦い続けられるのだろうか。どんな戦争も長く続くと厭戦気分が漂い始めて、休戦する。まして、一個人が巨大な社会機構に挑戦して走り続けられる訳もない。それとも、そんな考えは弱者の負け犬が自分を正当化しようとしているだけなのか。

ただ、そこに在るだけの風車に戦いを挑んで、疲れ果てて。

俺は馬鹿な奴なのか。

「おい、どう思う？」

くまのプーさんの頭を小突いてみる。

何も答える事なく、畳にうつ伏せに倒れた。